

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第 11 回会合 議事概要

1. 開催日時

令和 7 年 12 月 19 日（金）10 時 00 分～12 時 00 分

2. 開催場所

気象庁 7 階会議室 1（ウェブ会議併用）

3. 出席者

別紙のとおり

4. 議題及び検討結果の概要

下記の議題について検討を行った。

○ 議題 1：線状降水帯の予測精度向上に向けた取組の進捗状況について（報告）

- 令和 8 年度から、3 時間以内に線状降水帯の発生により非常に激しい雨が降り続く可能性が高まった場合に文章情報として「直前予測」が発表され、3 時間以内に線状降水帯等による大雨の恐れがある大まかな領域を図情報で示す「線状降水帯予測マップ」が提供される予定である。新たな予測情報の提供に期待するとともに、その活用方法について、マスコミや国民に対して十分な周知を図られることを望む。直前予測は文章情報と図情報の発表基準が異なるため、受け手に混乱を与えるおそれがある。このため、周知の仕方に工夫が必要である。具体的な過去事例を用いてわかりやすく説明することや、既存の情報との関係性を明確に示すことが有効と考えられる。
- 直前予測とともに新たに提供が開始される線状降水帯予測マップについては、視覚的な予測情報として大いに期待できる。一方で、線状降水帯予測マップは見逃しを減らす方向で開発が行われているのに対し、局地モデルの高解像度化など他の予測情報は空振りを減らす方向で取り組まれている。このように異なる方針で開発が進められている理由について、利用者にわかりやすく解説する必要がある。
- 局地モデルが 2km から 1km に高解像度化されることで、予測精度の向上が期待されることを確認した。数値予報モデルの高解像度化は重要である一方、アンサンブル予報におけるメンバー数の増加など、システム全体として制約がある中で、予測精度向上に向けて複数の観点から多様な手法を検討してほしい。

○ 議題 2：線状降水帯の予測精度向上に向けた学官連携の方策について

- 線状降水帯の機構解明を目的とした集中観測については、大いに期待したい。初年度の成果を適切に整理・総括するとともに、今後も継続的な観測が実施されることを望む。特に航空機によるドロップゾンデ観測は、機構解明に資する科学的価値が高い取り組みである。一方で、ドロップゾンデによって得られた観測データを数値予報モデルの同化に活用する意義については、より丁寧な説明が必要である。また、観測データを有効活用できる数値予報モデルの開発も重要であり、引き続き検討を進めていただきたい。
- 線状降水帯の分類表を用いて各事例を整理する取組は有意義であり、各分類における予測の実績を踏まえて予測現場への活用が図られている点は重要な取組である。
- 気象庁で線状降水帯の発生として情報発表を行っている基準と資料に示されている気象研究所の基準は異なっているため、評価手法について考え方を整理してほしい。

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第11回会合 出席者

有識者

いとう	こうすけ	
伊藤	耕介	京都大学防災研究所 准教授
いとう	じゅんし	
伊藤	純志	東北大学理学研究科地球物理学専攻 准教授
○ さとう	まさき	
○ 佐藤	正樹	東京大学大気海洋研究所海洋地球システム研究系 教授
しみず	しんご	
清水	慎吾	防災科学技術研究所 主任研究員
しゅっせ	ゆかり	
出世	ゆかり	防災科学技術研究所 主任研究員
たけみ	てつや	
竹見	哲也	京都大学防災研究所 教授
つばき	かずひさ	
坪木	和久	名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授
よしむら	けい	
芳村	圭	東京大学生産技術研究所 教授

(○：主査、敬称略、五十音順)

気象庁

参事官、数値予報課長、気象衛星課長、予報課長、気象研究所研究連携戦略官